

百科

Kakamigahara
Encyclopedia



旗本坪内氏

〽乱世を駆け抜けた鉄砲隊〽

令和8年度各務原市歴史民俗資料館企画展



坪内氏の由緒

坪内氏の由緒は、『本国加州富樫庶流坪内家一統系図並由緒』(資料1)に記されています。明治時代に坪内高国が記した、坪内氏の系図や由緒書がまとめられた冊子で、現在は坪内氏の菩提寺である少林寺が所蔵しています。

これによると、坪内氏は藤原鎌足に発し、加賀国の守護を務めた富樫氏の一族を称しています。歌舞伎の「勸進帳」で有名な富樫左衛門(資料2)を先祖とし、戦国時代に浪人していた富樫頼定が、犬山城主・織田



資料1 本国加州富樫庶流坪内家一統系図並由緒(少林寺蔵)

白巖(信長の叔父)に仕え、松倉(現各務原市川島松倉町)に住し、名を坪内に改めたことが坪内氏の始まりである、と記されています。

松倉城は、坪内氏の由緒書に登場する城です。織田信長が尾張国から美濃国を攻める際に滞在したとされていますが、その位置や規模など、詳細は不明です。江戸時代の絵図には、「松倉御屋敷」と描かれ、村の境界線などの基準点となっていました(資料3)。

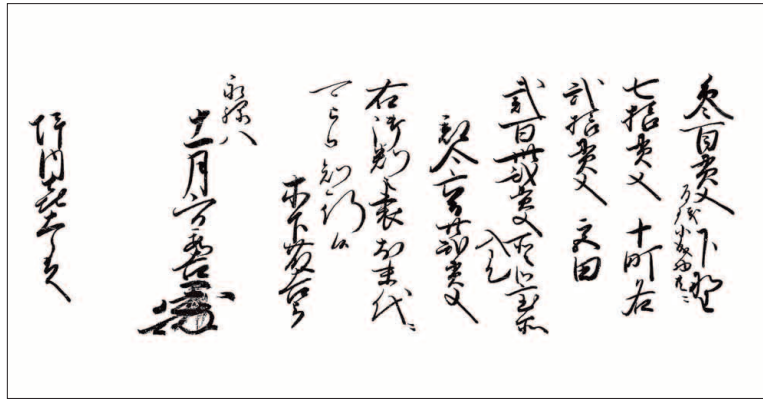


資料2 浮世絵『勸進帳』(右が富樫左衛門)(東京都立図書館蔵)

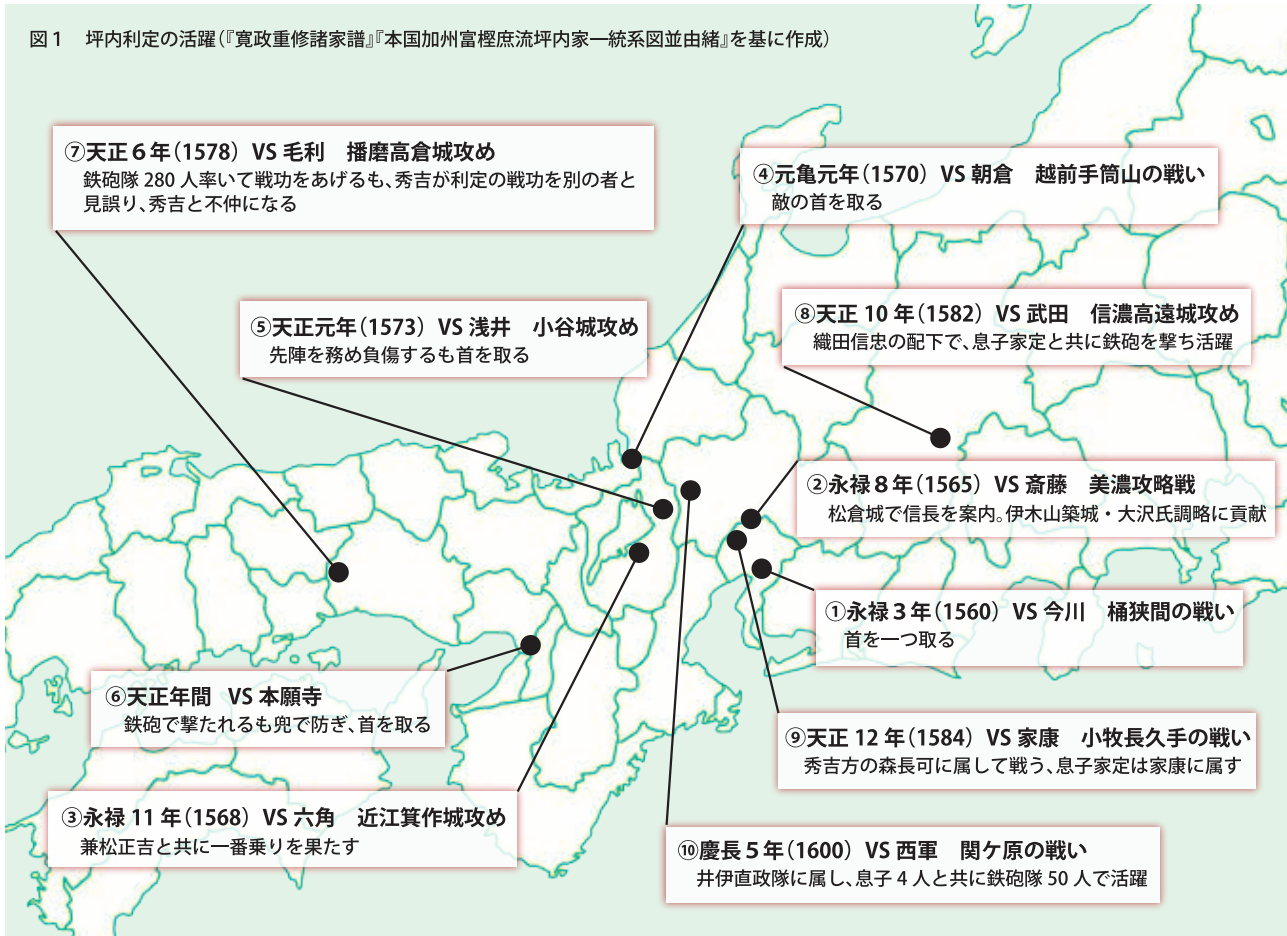
坪内利定と信長・秀吉

旗本坪内氏の初代は、織田信長・豊臣秀吉・徳川家康に仕えた戦国武将・坪内利定(1539〜1610)です。松倉城主であった利定は、信長の美濃攻略戦にあたって案内役を務め、秀吉と共に伊木山に砦を築いたとされています。その後利定は、鉄砲隊を率い、浅井氏、本願寺、武田氏との戦い等で活躍しました(図1)。自らの鉄砲隊に加え、伊賀・甲賀・根来などの鉄砲隊を指揮することもありました。

「坪内文書」は、戦国時代の坪内氏に関する文書群です。原本は現在行方不明ですが、明治時代に影写(原本の上に薄い紙を置き写し取る技法)したものを東京大学史料編纂所が所蔵しています。永禄8年(1565)11月に信長や秀吉が利定に対して領地を与えた文書、利定の鉄砲の使用を許可する文書、天正10年(1582)3月に織田信忠(信長の嫡男)が武田氏との合戦での活躍を褒めた文書などが含まれています。これらの文書は、由緒書に記された利定の活躍の信ぴょう性を裏付ける



資料4 木下秀吉知行充行状(「坪内文書」、東京大学史料編纂所影写本)



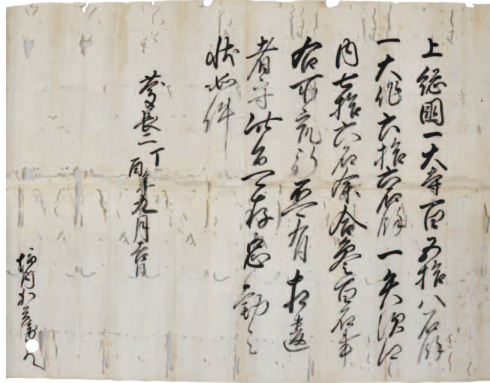
資料3 小網村絵図 弘化2年(1845)(岐阜県歴史資料館蔵)
北を上になるよう上下反転。村の北西に四角囲みで「松倉御屋敷」が描かれる。

坪内氏と小牧・長久手の戦い、関ヶ原の戦い

本能寺の変で信長が討たれ、羽柴秀吉と徳川家康が勢力を伸ばしていく中で、坪内氏も誰に味方するか選択を迫られます。

小牧・長久手の戦いの際、坪内利定は秀吉方の森長可に従って戦いました。利定は過去に播磨国での合戦の折、手柄を挙げたにも関わらず秀吉が誤って別の武將に褒美を与えてしまい、秀吉と不和になってしまったため、秀吉ではなく長可の傘下に入るという判断をしたようです。

一方、長男の家定は、家康に味方しました。家定の妻は家康に味方す



資料5 坪内嘉兵衛宛知行状写 (平島坪内家文書)

る生駒家の娘であったため、生駒家の本拠地である小折城(愛知県江南市)に入りました。親子で敵味方に分かれた坪内氏は、秀吉と家康の間で揺れる濃尾国境地帯の武士団を象徴する存在でした。

その後、家康が関東に移封となった際、坪内氏は一統で家康に従い、武蔵国・上総国に息子4人と併せて3400石の領地を与えられました(資料5)。また文禄の役の際、利定の息子たち4人は、叔父の前野長康に従って朝鮮半島での合戦に加わっています。

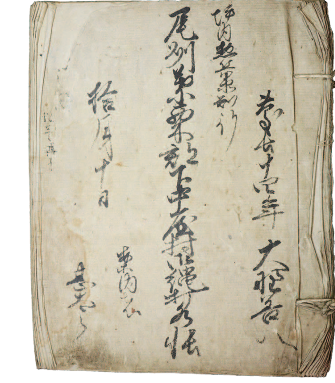
関ヶ原の戦いにおいて利定は、家康の家臣である井伊直政の部隊に属し、息子4人と共に鉄砲隊50人を率いて活躍しました(表紙イラスト)。井伊家に伝来した関ヶ原合戦を描いた屏風には、取った首を持ち帰る坪内利定が描かれています(資料6)。

慶長6年(1601)、坪内氏は親子5人合わせて各務郡・羽栗郡に6533石の領地を与えられ、旗本となりました。

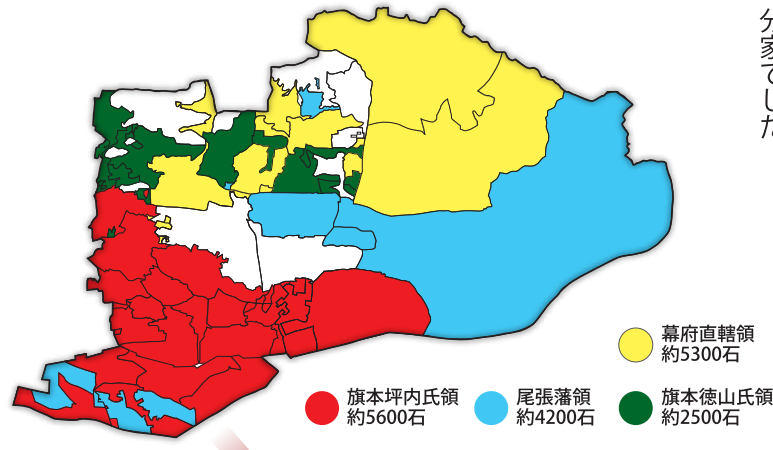
旗本坪内氏と内分家

坪内氏が与えられた領地は、現在の各務原市稲羽・川島地区を中心とした、戦国時代までは木曾川の中州だった地域です。江戸時代初期までは「尾州」とも認識されるような、尾張と美濃の国境地帯でした(資料8)。

利定の嫡男・家定は、領地支配の拠点として新加納に陣屋を構えました。家定の3人の弟は、前渡村・平島村・三井村にそれぞれ領地を分け与えられ、屋敷を構えました。三家は独立した旗本として領地を支配し、家臣を持っていました。江戸時代中期以降は本家の「内分」の家とされ、一人前の旗本として扱われなくなりしました。江戸での職務を失い、将軍にお目通りする機会がなくなっ



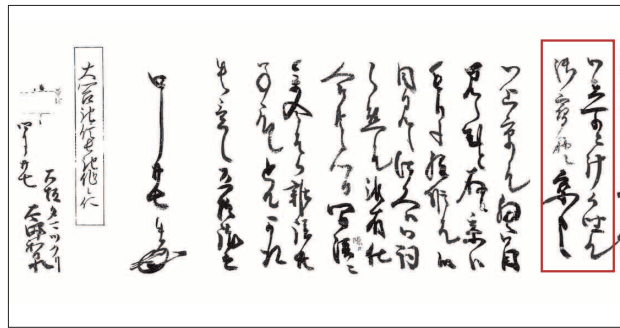
資料8 尾州葉栗郡下中屋村御縄打水帳 慶長14年(1609) (下中屋小島家文書)



た三家は、家格回復を目指し、砲術訓練や尾張藩主へのお目通りなど、様々な活動を行いました。対して本家は、三家を家来として取り込んでしまおうという動きを見せます。こうした対立は幕末まで続きました。

一方、本家の4代目の定長の弟・定賢が築地坪内氏、本家5代の定重の弟・定高が貝坂坪内氏という分家をつくりました。これら二家は江戸で将軍に仕えることができる正式な分家でした。

牛一は、織田信長の一代記である『信長公記』を記した人物として有名です。書状からは、牛一が関ヶ原の戦いについての書物を執筆しており、利定が自分と息子4人の活躍をそこに書き加えるように依頼していたことが分かります。



資料7 坪内利定宛太田牛一書状 (「坪内文書」東京大学史料編纂所)



資料6 井伊直政隊で活躍する坪内利定 (関ヶ原合戦図(井伊家伝来資料)(部分) 彦根城博物館所蔵 画像提供: 彦根城博物館/DNPartcom)

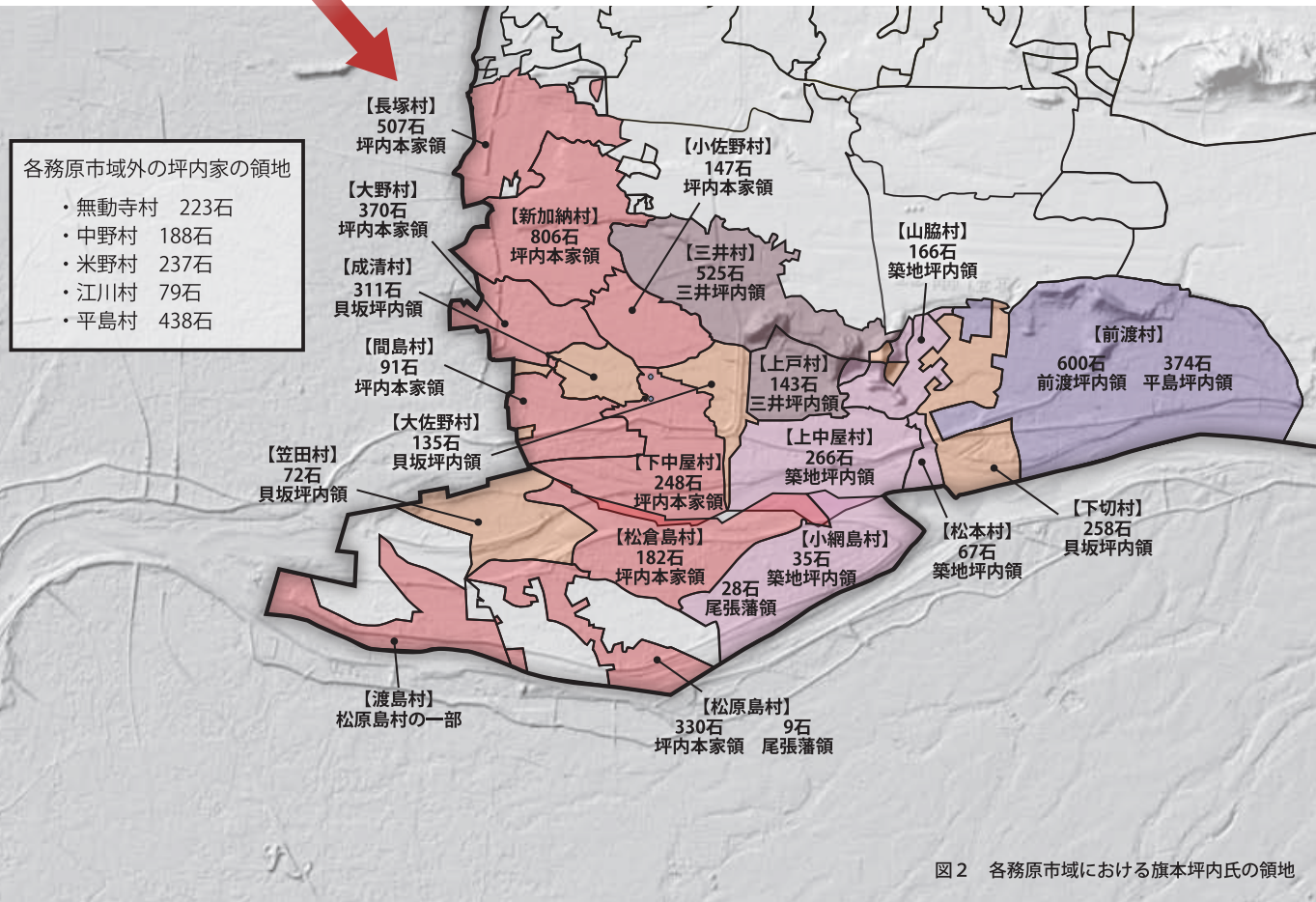


図2 各務原市域における旗本坪内氏の領地



旗本坪内氏系図

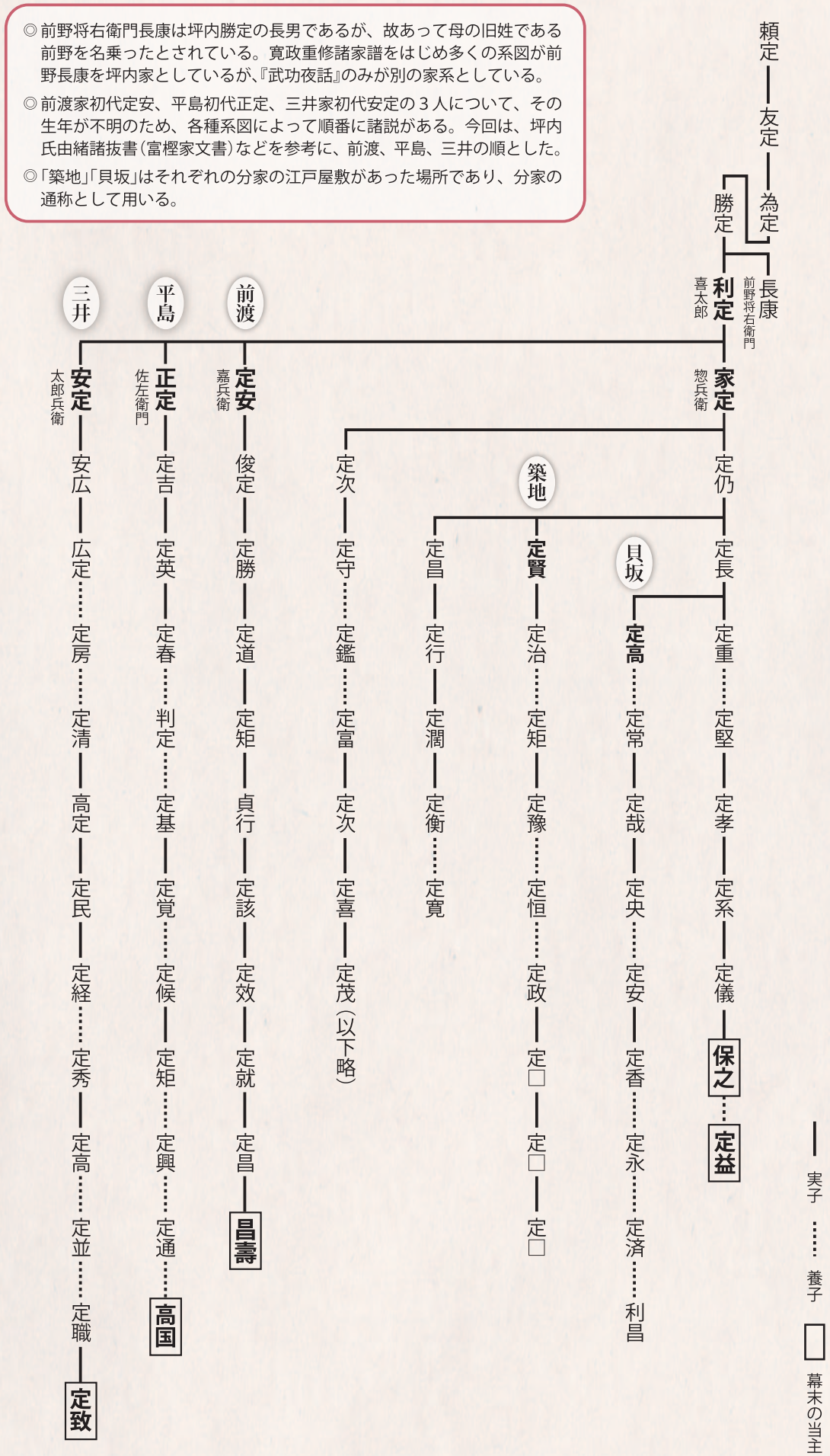


写真1 現在の新加納陣屋公園

江戸時代の坪内氏

江戸時代、本家は新加納村に陣屋を築きました(写真1)。新加納は、各務原台地の最西端の突出部に当たり、中山道が通っています。近年、陣屋跡の発掘調査を行った結果、台地の南の斜面近くに深さ3m、幅5mの堀が確認されています。

新加納は、織田信長的美濃攻略戦の際には斎藤方の、関ヶ原の戦いの前哨戦においては西軍の砦となっています。坪内氏は「新加納砦」の跡地を陣屋に転用し、有事の際に中山道を防衛する想定であったと考えられます。

本家2代目の坪内家定は、坪内氏の菩提寺として、新加納の少林寺を再興しました。本堂の西側には、本家と前渡・平島・三井の三家それぞれの墓所があります(裏表紙写真5)。

市内には、坪内氏が開基となった寺院がいくつかあります。本家6代の坪内定堅が開基となった瑞眼寺には、肖像画が残されています(資料9)。また大佐野の金龍寺は、本家坪内氏から江戸時代中期に分かれた分家である貝坂坪内氏が再興した寺院です。本堂の裏には、6代目の坪内定香が建立した代々の供養碑が残されています。金龍寺所蔵の大榮宗直和尚の頂相には、坪内氏の家紋である洲浜紋があらわれており、詳細は不明ですが、坪内氏の縁者の可能性があります(資料10)。

前渡坪内氏の子孫が所蔵する前渡初代の定安の肖像画は、洲浜紋の旗を背負い、左手に火縄銃を携え、右手に火縄を巻いています。砲術を得意とする坪内氏を象徴する像です(資料11)。前渡坪内氏の家臣であった永井家・富樫家にも、坪内氏に関する資料が残されており、歴史民俗資料館が保管しています。

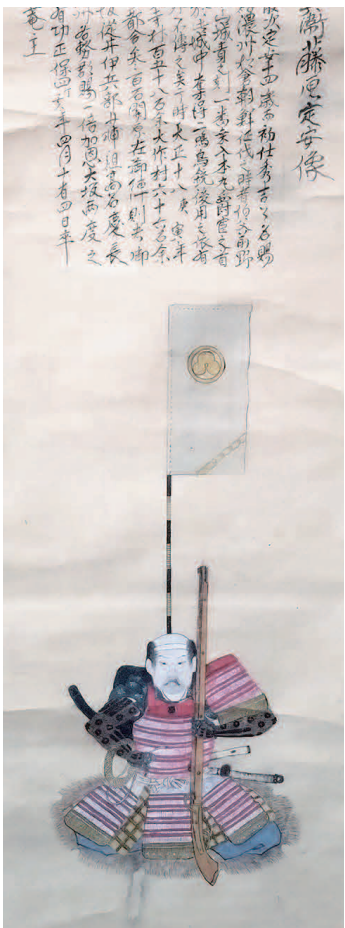
資料9 坪内本家六代坪内定堅肖像(瑞眼寺蔵)



資料10 大榮宗直和尚頂相(金龍寺蔵)



資料11 前渡家初代坪内定安肖像(個人蔵)



前渡・平島・三井の旗本坪内氏は、江戸時代中期以降、將軍にお目通りできない家格となっていました。江戸では旗本としての仕事ができなかったため、領地に居住する、全国的にも珍しい旗本でした。

そんな中、前渡坪内氏11代当主・昌壽(1835～1911、写真2)は、嘉永4年(1851)頃より、各務野での「砲術・火術稽古」を幕府に願ひ出ています。戦国時代以来の特技であった砲術によって、幕府に自



写真2 坪内昌壽とその家族(明治時代)

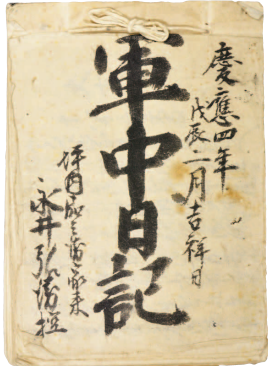
分たちの技術をアピールしようと考えていたようです。当時広大な原野であった各務野は、格好の稽古場でした。

嘉永6年(1853)、いわゆる黒船来航によって、幕府は異国船への対応を迫られました。品川への台場建設などが進む情勢の中で、昌壽は「異国船接近について、万が一江戸で非常事態が起これば、鉄砲を持つて参上する」と、持参できる11挺の鉄砲の大きさを書き添えた書状を江戸の本家へ送っています(資料12)。また、慶応2年(1866)、江戸で旗本が軍事訓練を受けた際、昌壽も家臣を引き連れて参上しました。昌壽は、関ヶ原の戦いの折の兄弟での軍功を述べ、現在も「煉筒」を自ら制作し、「砲術執心」に取り組んでいることなどを申し出ました(資料13)。幕閣に砲術を披露し、幕臣から大砲の製造方法について質問されるなど、注目を集めたようです。さらに、当時勘定奉行であった幕臣・小栗忠順と面会するなど、人脈構築にも努めました。昌壽の活動は活発でしたが、すぐに幕府から取り立てられるということはありませんでした。

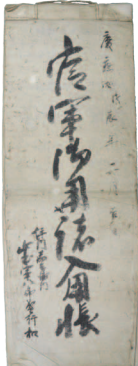
戊辰戦争の記録

慶応4年(1868)1月、鳥羽伏見の戦いを皮切りに、明治新政府軍と旧幕府軍の戦争が始まりました。前渡坪内氏は、まず近隣の尾張藩に従う旨を伝え、その後尾張藩同様に新政府軍に味方することを表明しました。新政府の東山道鎮撫総督府軍が大垣まで到着したところで、総督の岩倉具定に呼び出され、従軍して中山道を進むことになりました。

- 従軍した前渡坪内氏の8人
- ① 坪内昌壽…当主
 - ② 坪内監物…昌壽の弟
 - ③ 永井弘衛…前渡村北島の有力百姓、代々の家来。『戊辰戦争軍中日記』を記す
 - ④ 山本軍八郎…一族家来。『官軍御用諸入用帳』を記す
 - ⑤ 安中佐一郎…一族、家来
 - ⑥ 高崎浜之助…平島坪内氏に仕える医者
 - ⑦ 元正院…前渡村の神主
 - ⑧ 佐平…前渡村の農民



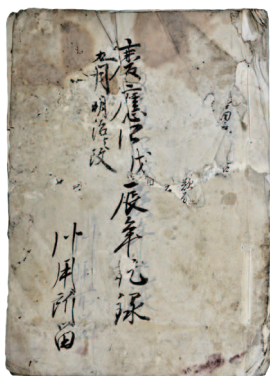
資料15 戊辰戦争軍中日記(永井家文書)



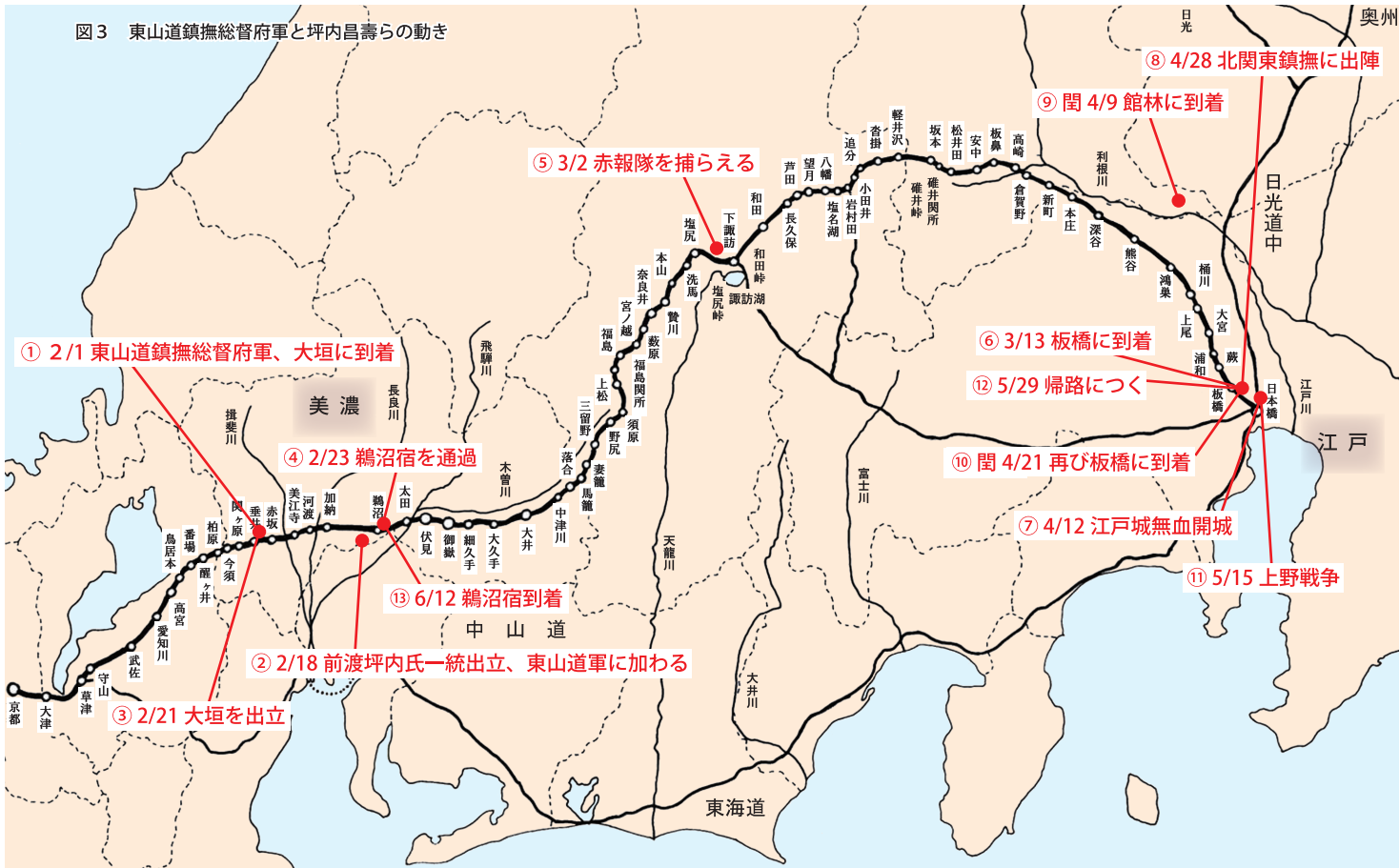
資料14 官軍御用諸入用帳(富樫家文書)



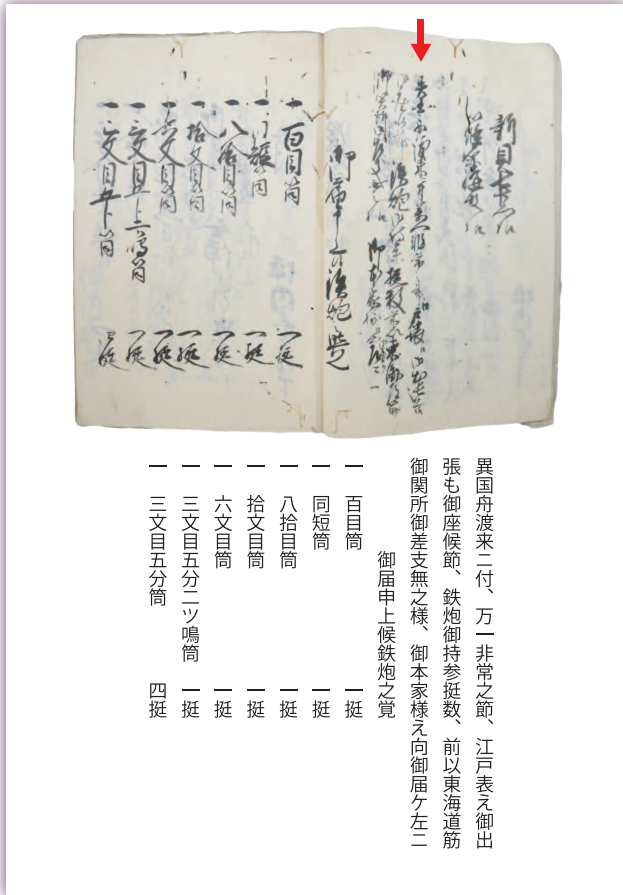
資料17 永井弘衛写真(永井家文書)



資料16 慶応四年御用部屋記録(永井家文書)



資料13 慶応二・三年出府日記 慶応2年(1866)(富樫家文書)



資料12 前渡坪内氏御用部屋記録 安政2年(1855)(富樫家文書)

表1 『戊辰戦争軍中日記』『官軍御用諸入用帳』から見る坪内昌壽の動き（抄出）

日付	出来事	主な支出
1月3日	鳥羽伏見の戦い。戊辰戦争始まる	
1月24日	名古屋へ行き、尾張藩へ恭順の意を示す	
2月9日	大垣に出向き、東山道鎮撫総督・岩倉具定に会う	
2月12日	東山道鎮撫総督の旗本警備を命ぜられる	
2月18日	一行出発。村中の人々が新加納まで見送りに来る	金壹分 新加納梅村屋茶代
2月21日	新加納立場梅村屋と加納宿にて休息、夕方大垣着	四十八文 たばこ
	東山道軍、大垣を出立する	
2月23日	総督一行、早朝に加納宿を出発、新加納にて休憩、鵜沼宿で昼食。前渡村の役人たちが残らず見送りにくる。太田宿に宿泊	貳百文 鵜沼宿にて昼支度代 貳百文 長持直し代
2月24日	太田宿を出発、今朝より加納藩50人加勢	金壹朱 割合酒肴
3月2日	和田峠豊橋にて、相良総三はじめ51人が呼び出され、武器を取り上げられて縄をかけられる	金貳朱 御肴代 銀五匁 御陣笠直し代
3月3日	相良総三の逗留跡を吟味したところ、残党20人おり、3人逃げ去り、17人取り押さえ、大小刀を取り上げ、縄をかけて諏訪宿へ連行。相良総三ら40人は首を落とされる	貳百文 ふじ屋にて酒肴 金壹朱 和田宿泊り 亀屋肴茶代
3月9日	高崎宿を出発し、深谷宿に着陣 先行していた薩長軍1500人は、熊谷宿の会津藩兵600人と戦闘、10人の負傷のみで1000人を討ち取る 本家定益、江戸より鵜沼に来る	百四拾八文 昌壽・監物わらし代 三百文 団子一統 貳百文 火縄大巻輪
	板橋宿に夜6時で着陣。ご本陣より大砲打方申しつけられる	九百文 蔵宿にて 犀弁廿八八分
3月16日	田舎へ行き、鶏3羽求める	百文 昌壽あんま責
3月20日	体調不良にて寝ている	貳百文 昌壽あんま料
3月24日	相撲大会の開催。坪内家来も全員呼ばれ、酒をもちう。長州藩も彦根藩も酒を飲んで大声で歌う。薩摩藩と長州藩の隊長が「天井揚」される	二十一日と二十四日迄 一貫五百四拾文 板橋宿飯田屋左文次酒代
4月1日	宇都宮辺りに会津・桑名の兵500人余りが集まっているため、一部部隊が出陣	貳拾八文 監物様きせるのを代
4月3日	呉服屋、この間注文のマントを仕立てに来る	金壹分 大蠟燭求代
4月5日	本陣で軍用金100両を借りる。帰陣後返す約束。1日に流山で旧幕府方の会津桑名3000人を降し、1500人と大将の近藤勇を捕らえたという報告が入る。昨日近藤が板橋宿に護送されてくる	三拾六文 歯みがきよじ 七匁 又酒三合
4月7日	呉服屋の山本屋新右衛門がマントを直しにくる。この間買ったものの不足金を払い終える 本家定益、新加納陣屋に入り50日間謹慎	拾壹匁 板橋宿山本屋新兵衛唐物品々 相求品物ハ書付有之
4月11日	「徳川慶喜は水戸へ退去、騒動に備えよ」と命がある	金壹分 手袋代
4月12日	江戸城無血開城。徳川慶喜隊は水戸へ出立、江戸城は尾張藩に引き渡される	金壹朱 たばこ大半丸

4月13日	東海道先鋒総督が江戸城視察。田安御門内の600人余りの旧幕臣を追い払うよう沙汰がある	金壹朱 あわび一杯 二百四拾文 酒二合
4月17日	大総督有栖川宮熾仁親王、江戸城入場 古河城が旧幕府軍に囲まれたので、因幡・土佐両藩が出兵する	金貳両貳分 黒羅紗ズボン二つ 監物入用品
4月19日	器械方にて焼玉製作に付き、総がかりで行く 総督様は江戸へ買い物、監物・高崎がお供する	百文 監物様江戸茶代 金三朱 大鯛壹枚代
4月26日	昨夜注進があり、結城城・壬生城・宇都宮城を取り返し大勝利であったと伝えられる。敵の東照大権現の絹の大旗と会津の旗が届いた	金四両貳分三朱 赤ブランケット三枚
4月28日	東山道軍、北関東方面に進軍。板橋宿で昼食、蔵宿で宿泊	金一朱 蔵宿寿屋泊り
閏4月2日	忍城へ着陣。総督が本丸に入る	
閏4月8日	忍藩より大砲方へ酒が出る。肴に饅頭2籠、酒一斗五升下されたが、飲み尽くすことができないため、五升樽2つを持参する	金貳朱 じょうよう 百拾八文 豆腐貳丁
閏4月9日	館林城に入場、総督から御酒料三両下される	
閏4月10日	豊永寛一郎、原安太郎が小栗忠順を追討。小栗親子の首を持参、家来5人の首を討ち捨て、馬3匹・兵器多数を分捕ったという	金貳分壹朱 ト錢四百文 館林藩大砲方式人案内
閏4月14日	館林藩から蕎麦をもちう、至って風味がよかった	金貳分貳朱 桐油六枚
閏4月19日	朝館林を出発し、忍城下にて昼食、鴻巣へ夕方着陣	貳百文 わらし貳足
5月1日	総督、遠征を終え江戸因幡藩屋敷へ入る	
5月2日	徳川家は、徳川亀之助が継ぐことが決まったと聞く	百六拾四文 木瓜五つ
5月2日	大総督からお達しがあり、旧旗本のうち領地のある者については、「王臣」になると聞く	金三分 元正院と佐平五月分の給金
5月8日	帰順した旗本は、今より「朝臣」となることを聞く	拾八文 水引三筋
5月9日	江戸城に登城。大総督から他の東山道軍に従軍した旗本たちと共に「朝臣」に任じられる	金貳両壹分貳朱と貳百六拾八文 袴一具
5月15日	上野戦争。明け方より戦闘があり、官軍大勝。午後4時頃には寛永寺の本堂・中堂が炎上	金貳朱 わらし八足 銀拾匁五分 饅頭貳足
5月16日	昨日討ち漏らした者が、浅草近辺に集まってきたため警戒する	金貳朱 いなだ吉本
5月17日	戦場跡で討死した200ほどの死体を見る	四百文 小菊 貳状
5月18日	残党の賊兵を探索する	四拾八文 ようじ吉本
5月20日	登城して総督に会い、東山道総督を免じられたことを聞く	六拾四文 蛭八曳代
5月21日	他の旗本から、東山道総督が廃止になった上は役目も終わったので帰陣したいという相談をされる	三百三拾貳文 監物様蛭四十八
5月23日	登城し、領地が水害に遭って送金がままならないため、国元に帰ることを願い出る。嘆願の趣旨を書面にして出せと言われたため、書面で訴える	貳匁 土鍋壹つ 八百文 うどん 金三朱 刀研代
5月27日	帰国願が認められ、印鑑を手渡される	銀三匁 御泊り札
5月29日	帰国するため、江戸を11時過ぎに出立。午後4時半頃に蔵宿の本陣に到着	金三朱 ぼたん糸代 七百四十八文 馬着代 百文 白砂糖代
6月5日	塩名田で川の渡し賃を要求されたが、御用による通行であるため抗議し、無事川を渡る	四百文 和田泊り酒代
6月12日	鵜沼宿に到着、領地の前渡村に戻る	貳百文 薬師様御賽銭

東山道鎮撫総督府軍

慶応4年（1868）2月、大垣の東山道鎮撫総督府に、前渡の坪内昌壽、平島の坪内高国、三井の坪内定致が馳せ参じ、昌壽と定致が従軍することにになりました。対して本家の当主・坪内定益は、江戸から急ぎ帰還しましたが、謹慎処分となつています。

2月21日、東山道軍は大垣を出陣、23日に新加納にて休憩、鵜沼宿を通過し、中山道を進軍していきました。行軍の詳細は、永井弘衛が行軍中の事件を記した『戊辰戦争軍中日記』や、山本軍八郎が、金銭の出入りを記した『官軍御用諸入用帳』から知ることができます（表1）。

赤報隊の捕縛

3月2日、東山道軍は赤報隊の隊長・相良総三を捕縛します。赤報隊は、脱藩士や豪農などを隊員とした部隊で、新政府軍の先鋒隊として、年貢半減を宣伝しつつ中山道を進軍していましたが、下諏訪で追いついた東山道軍によって処刑されました。年貢半減を掲げる赤報隊は、資

金調達が必要な新政府にとって、都合な存在となつたためであると言われています。『戊辰戦争軍中日記』は、相良ら捕らえ、40人ばかりの首を落とし、大砲や小銃を奪い取つたことを記しています。

江戸城無血開城待機中

3月13日、東山道軍は板橋宿に着しました。しかしその後、4月12日に江戸城が無血開城されるまで、一行は暇を持て余します。『官軍御用諸入用帳』には、あんまを受けたり、ズボンや羽織などの衣類、酒や肴将棋の駒を購入したことが記録されています。3月24日には相撲大会が開催され、長州・彦根・薩摩らの藩兵たちと、飲めや歌えやの大騒ぎをしたようです。

近藤勇捕縛！

4月4日、板橋宿にいた昌壽らのもとに、新選組局長であり旧幕府軍として活動していた近藤勇（写真3）が護送されました。近藤は流山（現千葉県流山市）で旧幕府軍300人を率いていましたが、新政府軍に自ら投降し、捕らえられました。近

藤は取り調べを受けた後、4月25日に板橋で斬首されました。『戊辰戦争軍中日記』には、近藤が家来1人と共に護送されてきたこと、近藤の部隊から鉄砲数百挺を取り上げたことが記されています。

小栗忠順の死

閏4月10日、東山道軍の斥候部隊が、幕府の重臣・小栗忠順（写真4）とその息子の首を持参しました。彼らは小栗の家来の5人の首を打ち捨て、馬3匹とその他兵器も分捕つてきたと記されています。昌壽はこの1年前、勘定奉行であった小栗に挨拶し、贈り物をしています。出世の足掛かりにしようと頼つた人物の死も、淡々と記されています。

上野戦争

5月15日、上野の寛永寺に籠つていた旧幕府軍「彰義隊」を新政府軍が攻撃し、大勝しました。昌壽らは直接戦闘には参加しませんでした。新政府軍が旧幕府軍から大砲十二門、葵の紋の入った旗、膨大な弾薬などを奪つたことなどを見聞きし、記録しています。2日後に昌壽らが



写真3 近藤勇



写真4 小栗忠順

（国立国会図書館「近代日本人の肖像」）

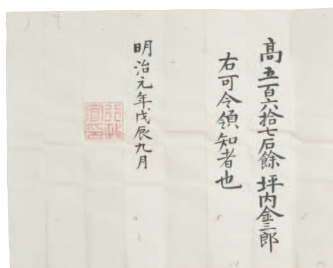
坪内一族のその後

前渡・平島・三井の三家は、明治新政府に早期に味方することを表明した功績を認められ、領地を安堵あんどされました(資料18)。本家も後日、領地を安堵されました。

坪内昌壽は、京都に移住し、京都御所玄閑詰、勸業課工商係などの職を務めた後、明治18年(1885)に前渡村に帰村し、各務原大砲演習場の警備員などを務めながら余生を過ごしました(資料19)。



資料19 晩年の坪内昌壽



資料18 平島坪内氏への領地安堵状
(平島坪内家文書)

坪内一族の墓は、新加納の少林寺にあります(写真5)。現在も、坪内氏ゆかりの史跡が、市内各地に残っています。

坪内氏と各務原

坪内氏は、戦国時代に砲術に長けた一族として活躍しました。幕末にもその由緒を忘れず、各務野で砲術稽古を行い、新政府に認められました。各務野は、明治時代に陸軍の大砲演習場となり、大正6年(1917)に各務ヶ原飛行場になります。近代の各務原は飛行場を中心に工業が発展し、「ものづくりのまち各務原」に成長を遂げました。

乱世を駆け抜けた鉄砲隊の歴史が、現在の各務原市の産業に繋がっているのです。

表紙イラスト／坪内響想

令和8年度
各務原市歴史民俗資料館企画展
旗本坪内氏
『乱世を駆け抜けた鉄砲隊』
開催日 令和8年9月5日(土)～
10月4日(日)
会場 各務原市立中央図書館3階
展示室A
主催 各務原市教育委員会

写真5 旗本坪内家墓所(少林寺・市指定文化財)

